東海大學日本語文學系紀要
多元文化交流 vol.2 2010年6月

〈研究ノート〉

複合動詞「～かける」の前項動詞と意味用法の関連について

蔡 薰婕

摘要：

本文針對複合動詞「～KAKERU」的前項動詞和含意用法之間的關聯做論述。複合動詞「～KAKERU」主要有兩種意思：①表示前項動作開始的「始動」、②表示動作或作用方向的「指向」。筆者假設用法①和用法②的前項動詞屬性應當不同，故本文旨在找出複合動詞「～KAKERU」用法①和用法②的前項動詞分別具有什麼樣的特徵。蒐集128個不同的複合動詞「～KAKERU」，以各種觀點分類前項動詞，在分類觀點上除採用廣爲人知的自他動詞、意志無意志動詞等分類外也加入作者自身的視點。再利用統計的方式分析分類後的結果，確認用法①和用法②的前項動詞多爲何種屬性。又，複合動詞「～KAKERU」的含意在用法①和用法②下還可以做更細緻的區分，在含意用法的細分上筆者採用姫野(1999)的分類法，並近一步探究是否在細部的含意用法分類下也可以看見前項動詞的特徵。

關鍵字：

複合動詞、かける、前項、後項

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

1．はじめに

複合動詞「～かける」は造語力が高く、様々な語と組合わせることができる言葉であるが、姫野(1999)の調査によると、複合動詞「～かける」は複合動詞の中に組合せが多い語のランキング第五位である。おおよそ236語有るそうである。

この多くの語の中には、概ね二つの意味がある。

（1）　だんだん辺りが暮れかけてきた。部屋の中が暗くなってきた。

（正岡容「圓太郎馬車」）

（2）　村の若い衆は由藏の家へ押しかけて來て、由藏を警察へ引つ張つて行かうとした。（長谷川時雨「マダム貞奴」）

（3）　鼠色のペンキを塗つた幅の狭い梁木が、もう半ば腐りかけてゐた。

（海野十三「恐怖について」）

（4）　「随筆には虚構は、許されないのであって、」と書きかけて、あわてて破る。

（太宰治「作家の像」）

（5）　病院生活は、牢獄生活と変りはない。殊に二度も死にかけた僕のような重症患者には、その感じがなお強い。（豊島与志雄「慾」）

例（1）は「暮れることが始まる」という動作開始の時間的局面を表し、例（2）は「大勢の人が有藏の家へ出向く」という動作の方向を表している。即ち、「～かける」は開始と方向性という二つの意味を有しているのである。しかし、詳しく観察してみると、例(1)のような開始を表す場合は例（3）～（5）で示されるように、さらにその意味を下位分類することが可能である。例（3）は「腐ることが始まって、現在腐っているし、今後もこの状態が続くと予想される」という進行中の局面で、例(4)は「書くことをはじめて、少し書いたが、書くことをやめた」という開始した動作を放棄する意味で、例(5)「死ぬことにほぼ至って、死にそうである」という動作が開始直前の情景を描く文である。

以上いずれの例でも同じ「動詞連用形＋かける」の語構造であるが、複合動詞「～かける」の持つ意味は様々である。この構造は、前にくる動詞に特に制限がなく、他動、自動、意志、非意志…など自由度が高いと言われる。そこで、前に位置する動詞の性質によって意味用法の

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

区別ができるかと仮定し、「～かける」の造語成分の組合せを考察してみた。本稿では、先行研究を踏まえつつ、「～かける」の前置部が異なる128語をデータに、前置される造語成分を意志/非意志、瞬間/持続などに分類し、その意味用法の傾向を探った。こうすることによって、何かルールを見いだすことができればと考える。

議論は以下のように展開する。まずは、下の2.で各用語の定義及び手法を説明し、そして、3.で前項動詞の分類と特徴を検討、4.で意味の下位分類と前項動詞の特徴を考察、5.でまとめる。最後は、データとなる動詞のリストである。

2. 定義と手法説明

大辞林第二版によれば、「複合動詞は二語の複合によってできた動詞。」と説明されている。この中に「名詞＋動詞」、「動詞連用形＋動詞」、「音便化した動詞的要素＋動詞」などのパタンが考えられるようが、本稿では、「命がけ」というような「名詞＋動詞」や、「動詞て形＋動詞」の補助動詞形式や、「つっかける」のような「音便化動詞的要素＋動詞」などの用法は扱わないで、「動詞連用形＋動詞」のみに注目する。前に来る動詞を「前項動詞」とし、後に来る動詞を「後項動詞」と呼ぶことにする。

1.で説明したように、複合動詞「～かける」には概ね二つの意味があるが、呼び方については姫野(1999)の提案に従う。

（「～かける」）が後項動詞として働く場合の意味･用法は、 対象に向かって何らかの動作･作用を及ぼすという共通点が見られる。これを「指向」と呼ぶことにし…(中略)…次に、動作･作用の始まり、あるいはその寸前の状態を表す動きがあるが、これを「始動」と呼んで一括する。

姫野(1999:122)

筆者は「指向」という意味の「～かける」と「始動」という意味の「～かける」の前項動詞には、それぞれの性質が有ると考え、収集して来た異なる128語の前項動詞を分類し、各意味用法の前項動詞の性質を探る。分類する際に用いる観点や、分析の方法などは次の2.1で詳しく述べる。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

2.1　調査手法と分類する際用いる観点

今まで動詞については、自動詞･他動詞、継続動詞･瞬間動詞、意志動詞･無意志動詞などの分類があったが、継続動詞･瞬間動詞の不備を指摘し動詞の動作と変化に注目する分類もある。ただ、動詞には様々な側面があり、動詞の方向性やその動作がもたらした結果などに目を向けることは可能ではないかと考え、こういった視点も分析に加えた。まとめて言うと、前項動詞の分類に当たって採用するのは①先行研究で提示した動詞分類の視点:自動詞･他動詞、状態動詞･継続動詞･瞬間動詞、動作動詞･変化動詞、意志動詞･無意志動詞②先行研究で扱わなかった視点:静態動詞･動態動詞、動詞の結果性、動詞の方向性である。こういった観点から、前項動詞性質上の傾向を探る。上記各分類の定義を順次に説明する。

2.1.1　先行研究における動詞分類

動詞分類においては、「自動詞･他動詞」、「継続動詞･瞬間動詞」、「意志動詞･無意志動詞」などの分類が知られている。まず自動詞･他動詞については、広辞苑第五版の解釈によると、自他動詞の意味はこうである。

･自動詞:他に作用を及ぼす意味を持たない動詞。目的語が無くても意味が完結する。「走る」や「咲く」の類。

･他動詞:ある客体に作用を及ぼす意味をもつ動詞。目的語が無いと意味が完結しない。日本語では、目的語として多く助詞「を」を添えて表す。「本を読む」の「読む」の類。

本稿はこの定義に従い、各前項動詞の属性を決定する際、広辞苑第五版で提示した動詞の自動、他動を用いる。

動詞分類においては、里程標である金田一(1976)の「国語動詞の一分類」がある。金田一(1976)は動詞分類の基準を時間的に見た動作･作用の性質という点に置いたが、その分類を整理すると次のようになる。

①状態動詞:状態を表す動詞であり、通常、時間を超越した観念をあら会わす動詞である。「～ている」をつけることが無いのを特色とする。「ある」「できる」の類。

②継続動詞:動作･作用を表す動詞であるが、ただしその動作･作用は、ある時間内続いて

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

行われる種類のものであるような動詞である。「～ている」をつけることが出来、若しつければ、その動作が進行中であること。例えば、「本を読む」の「読む」、「字を書く」の「書く」の類。

③瞬間動詞:継続動詞と同じく動作・作用を表す動詞であるが、その動作・作用は瞬間に終わってしまう動作・作用である動詞である。「～ている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す。例えば「人が死ぬ」の「死ぬ」、「電燈が点く」の「点く」の類。

④第四種動詞:時間的観念を含まない点で第一種の状態動詞と似ているが、第一種の動詞が、ある状態にあることを表すのに対して、第四種動詞はある状態を帯びることを表す動詞である。いつも「～ている」の形で状態を表すのに用いる。例えば、「山が聳えている」の「聳える」の類。　　金田一(1976:7-9)

小稿では、①状態動詞、②継続動詞、及び③瞬間動詞をそのまま援用する。ただ、④第四種動詞は状態を帯びることを表す動詞である為、実際の動作が無いと言える。第四種動詞は少ないのみならず、実際の動作が無い故に、第四種動詞を「静態」動詞とする。静態動詞と動態動詞の区別と定義は2.1.2で説明する。

先行研究では、金田一(1967)は動作・作用の時間に注目したが、金田一(1967)と違い、動詞の動作と変化に着眼し、異なる動詞の側面を提示した石井(2007)がある。石井(2007)は動詞を動作と変化の観点[1]でとらえ、動詞を状態動詞、動作動詞、変化動詞に分類した。特に、動作動詞や変化動詞をそれぞれ再分類し、「②主体動作自動詞」、「③主体動作他動詞」、「④主題動作客体変化他動詞」、「⑤主体変化自動詞」、「⑥主体変化が伴う主体動作他動詞(再帰動詞)」などの下位分類がある。その詳細は下表に示すが、石井のいう状態動詞は金田一のいう状態動詞とは同じものだと考えられる。石井は複合動詞の前後項動詞をそれぞれ以下の①～⑥に分類し、前後項動詞の組合せを詳しく検討したが、複合動詞は前項が主体動作で、後項が主体ないし客体変化を表す傾向が顕著であるという結果であった。詳しくは3.で述べるが、「～かける」も同じような傾向があり、前項が主体動作動詞である語が明らかに多いことが観察できた。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

《 表一 》

状態動詞	「～ている」という形を取らないか、とっても「状態」しか表せない	《主体の状態》を表す	「有る」「居る」…	自	①
動作動詞	「～ている」という形で「動作の継続」を表す	《主体の動作》を表す	「歩く」「踊る」…	自	②
			「言う「書く」…	他	③
		《主体の動作》と同時に《客体の変化》をも表す	「上げる」「集める」…	他	④
変化動詞	「～ている」という形で「変化の結果の継続」を表す	《主体の変化》を表す	「固まる」「崩れる」…	自	⑤
		《主体の変化》が伴う《主体の動作》を表す	「着る」「かぶる」…	他（再帰）	⑥

石井(2003:35)より

取り上げる複合動詞「～かける」の後項であるカケルは④主体動作客体変化動詞に属すもので、収集して来た用例の前項動詞をこの観点によって分類するが、詳細を次の3.で述べることとする。

以上紹介してきた分類の他に、「意志動詞・無意志動詞」という分類がある。仁田(2002)は「自己制御」との概念を提出し、意志動詞と無意志動詞を説明する。「自己制御」については、仁田(2002)は次のように述べている。

(1) すぐこちらへ<u>来い</u>！

(2) あした天気に<u>なぁれ</u>！

…(中略)…(1)の、「来る」という動き、そして[スグコチラニ来ル]という事態は、動きの主体が自らの意志でもってその実現を制御できる動き・事態である。それに対して、(2)の、「なる」という動き、そして[アシタ天気ニナル]という事態は、動きの主体が自らの意志でもってその実現を制御できる動き・事態ではない。主体が自らの意志でもってその実現を制御できる事

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

態を《自己制御的な事態》と呼んでおく。　仁田(2002:142)

仁田(2002)はこのような自己制御的な事態とそうでない事態というコンセプトを用い、意志動詞と無意志動詞を以下のように定義付けている。

自己制御的な事態を作りうる動詞を《意志動詞》と呼び、けっして自己制御的な事態を作ることの無い動詞を《無意志動詞》と呼んでおく。これは、言い換えれば、意志動詞は、場合によって非自己制御的な事態を作ることもあるが、無意志動詞が自己制御的な事態をつくることはない、ということを意味している。　仁田(2002:143)

仁田の定義に従い、「言う、歩く、誘う、歌う、追う」などの類を意志動詞に分類し、「終わる、腐る、傾く、暮れる、始まる」などの類を無意志動詞に分類する。

以上、先行研究の動詞分類を見て来たが、まとめると「自動詞・他動詞」、「状態動詞・瞬間動詞・継続動詞」、「動作動詞・変化動詞」、「意志動詞・無意志動詞」という四つのパターンになる。前項動詞を分類する際、まずこの四つに分類することを試みる。ただ、複合動詞「～かける」の「始動」及び「指向」二つの意味用法における前項動詞の性質傾向を探る際、異なる動詞分類を採用し、多面的な分析を行うことを通して、より全面的な結果が出るように、この四つのパターンの補足として、以下の2.1.2で筆者の考えた動詞の側面を述べる。

2.1.2.　動詞の静態・動態、結果性と方向性

前述では、動詞の分類を概観して来たが、これらの分類を補い、三点を追記する。

①静態動詞・動態動詞:動詞は事物の動作・作用を表現するものだとすれば、実際の動作があるものと、実際の動作が無いものがある。その中、実際の動作があるものを「動態動詞」とし、実際の動作のないものを「静態動詞」とする。詳しく言うと、静態について、本稿では金田一(1976)の言う第四種動詞のほかに、思考・知覚・感覚動詞などをも静態動詞とする。つまり、本稿は脳(知力)以外の人体器官を駆使して行う動作のある動詞を動態動詞と定義し、それ以外の動詞を静態動詞とする。

②動詞の結果性:動詞の動作や作用が行われ、ある種の結果が出るものと出ないものがあると考える。例えば、「腐る」というのは、ものが新鮮な状態から腐敗になるということを示す動詞で

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

あるが、結果として主体の状態が変わった。この状態の変化を結果と見なす。「消す」の場合、存在だったものが消えたので、この客体の状態変化も結果と見なす。つまり、動作・作用の実行により、主体または客体が変化するものを結果性のある動詞とする。そうでないのを結果性の無い動詞とする。

③動詞の方向性:行く、歩くなど移動を表す移動動詞はもちろん、立つのような移動を表さない非移動動詞もある種の方向性を示している。例えば、「立つ」は体を垂直の姿勢にする上方向を示していると考えられる。立つのような何かの方向性を有する動詞は「方向性有り」とし、書く、食べるのような方向性を持たない動詞は「方向性なし」とする。

先行研究の提示した動詞分類のほか、これらも分類項目に入れ検討を進めていく。では、以下において、以上の観点に基づき観察された前項動詞の特徴について述べる。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

3. 複合動詞「～かける」の二つの意味用法における前項動詞の特徴

以上、先行研究を概観してきた。本節では、2.の分類提案に基づき、「～かける」の前項動詞について分類を試みる。その結果を表二のように示しておく。

《 表二:前項動詞の分類結果 》

始動性「～かける」(計：75語)	数	%	指向性「～かける」(計53語)	数	%
自動	46	61%	自動	14	26%
他動	26	35%	他動	34	64%
自動／他動	3	4%	自動／他動	5	9%
意志	50	67%	意志	49	92%
非意志	22	29%	非意志	4	8%
意志／非意志	3	4%	意志／非意志	0	0%
瞬間	47	63%	瞬間	22	42%
継続	28	37%	継続	31	58%
動態	53	71%	動態	50	94%
静態	22	29%	静態	3	6%
方向性有り	40	53%	方向性有り	42	79%
方向性なし	35	47%	方向性なし	11	21%
結果性有り	30	40%	結果性有り	14	26%
結果性なし	45	60%	結果性なし	39	74%
主体動作有り	54	72%	主体動作有り	50	94%
主体変化有り	21	28%	主体変化有り	3	6%
客体変化有り	10	13%	客体変化有り	13	25%
②/③主体動作（自/他）	3	4%	②/③主体動作（自/他）	4	8%
②主体動作（自）	25	33%	②主体動作（自）	11	21%
③主体動作（他）	16	21%	③主体動作（他）	21	40%
④主体動作客体変（他）	10	13%	④主体動作客体変（他）	14	26%
動作動詞	54	72%	動作動詞	50	94%
⑤変化動詞（自）	21	28%	⑤変化動詞（自）	3	6%

ここでは、始動性「～かける」の自動詞を例に用い、表二の数字について説明を行う。データとする動詞の中に、始動性「～かける」が75語ある。このうち、前項が自動詞の語は46語である。即ち、始動性「～かける」の前項において、自動詞は61%を占めているのである。この結

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

果から、分布上の対称性と落差に注目したい。表3で示される数値から、始動と指向とはほぼ同じような比率を占めているものが見受けられる一方、始動と指向のどちらかが明らかに比率が低い、という落差も観察される。このことから、両者の間にある落差は、始動か指向かを区別する際の決め手として働くのではないかと考える。この統計から観察された始動性「～かける」と指向性「～かける」における前項造語成分の相違を以下のようにまとめる。

<1>「～かける」は有る、居るなどの状態動詞と結合しない。

金田一(1976)の分類によれば、状態動詞は「～ている」形を取らない動詞と規定されている。この類の動詞は状態を表すというより、状態の標識である。例えば、「ある」「居る」は、存在するか、存在しないかが明確であり、曖昧不明の中間状態を有していない。このため、「始動＝そうなり始める」という意味に合致せず、結合しないのであろう。また、状態標識と「指向＝先方に動作・作用を及ぼす」という意味と関連性があるとは考えられにくく、両者の結合は難しいのであろう。このように、状態動詞は「始動」にも「指向」にも結合しないことから、それが意味用法を区別する際の判断材料になりにくいということが分かる。

<2>始動性「～かける」は自動詞が多いのに対し、指向性「～かける」は他動詞の比率が高い。

<3>始動性「～かける」は瞬間動詞が多いのに対し、指向性「～かける」は継続動詞の比率が高い。

<2>、<3>を合わせて検討すると、前項が自動瞬間動詞の語は計36語があり、うち83%(30語)は「始動」という意味で、「指向」という意味は17%(6語)である。一方、前項が他動詞かつ継続動詞の場合は、計31語あり、うち35%(11語)は「始動」という意味で、「指向」という意味のものは64%(20語)である。この結果から、前項が自動詞かつ瞬間動詞の場合、「始動」の意味として働くことが多いと言えよう。

<4>前項が無意志動詞の場合、「始動」と解釈されることが多い。

始動性「～かける」でも指向性「～かける」でも前項が意志動詞の比率が高い。「指向」では、無意志動詞はマイノリティの9%に対し、「始動」ではその三倍の29%も占めている。データ分類の結果から見れば、前項が無意志動詞のものは計27語であり、その中「始動」と解釈される「～かける」は81%(22語)を占めていることが分かった。これについては、無意志動詞は状態を表すものが多いため、「指向」の意味と合致せず、結合しにくいと考えられよう。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

<5>前項が静態動詞の場合、「始動」と解釈されることが多い。

始動性「～かける」でも指向性「～かける」でも前項が動態動詞の比率が高い。「指向」においては静態動詞がほとんどないのに対して、「始動」では静態動詞は29%を占めている。128語のうち、前項が静態動詞のものは25語があり、そのうち、始動性「～かける」は88%(22語)と圧倒的であった。これによって、前項が静態動詞の場合、始動と解釈される可能性が高いと言ってよいと考えられよう。前述した<4>と同じように、静態動詞には状態を表すものが多いことから、その状態になる寸前の将現態か、その状態になり始まった既現態という始動と結合しやすいのであろう。

<6>前項が⑥変化動詞(自)の場合、「始動」と解釈される。

始動性「～かける」では、主体変化のある前項は28%を占めているのに対して、指向性「～かける」はわずか5%(3語)である。言い換えれば、前項が主体変化を起こす変化動詞自動詞であれば、始動性「～かける」と推測してよいのであろう。

ここまで観察してきた前項動詞の特徴はいずれも始動性「～かける」の判断材料である。では、指向性「～かける」には何らかの規則がないのであろうか。その規則を探るために、表3で示された「指向」の前項動詞の分布傾向に基づき、動詞性質と方向性、また石井(2007)で提案された主体動作と変化といった複数の条件を手掛かりとし、指向性「～かける」における前項の特徴について考察を行った。ところが、それらの手掛かりから指向性「～かける」に関する目立つ傾向が見られないようである。やや弱いが、一つだけ指摘することができる。それは次の<7>である。

<7>前項が「方向性有りの他動意志動詞」の場合、「指向」と解釈されやすいようである。

前項が「他動意志動詞」の場合、指向性「～かける」は58%(計59語中の34語)であるが、それに「方向性」という条件を付け加えると、比率が67%を上回る(計42語中の28語)ことになる。これは、既に方向性のある動詞は、動作・作用の終点か方向かを示す働きを持ち、語彙的に不自然なく容易に「指向」と結び付けるからであると考えられよう。尚、表3から分かるように、方向性は指向性「～かける」の80%であり、相当の比率を占めている。方向性という特徴は指向性「～かける」に見られるものであるが、始動性「～かける」においては特徴的ではないようである。

前後項の結びつけから生じる意味から見れば、始動性「～かける」の意味中心は前項にあ

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

ることが分かる。例えば、始動性を表す「書きかける」は前項の「書き(書く)」が主要動作で、後項のカケルは動作のアスペクトを表す。このことから、始動性「～かける」は補文関係によって結ばれると言えよう。

これに対し、指向性「～かける」の意味中心は後項にあると言い切れないようである。「体に香水をふりかける」は「体に香水をふってかける」に言い換えられ、「体に香水を振る」に言い換えても、意味はほぼ同様である。しかし、「質問を畳みかける」は、て形の介入が考えられにくく、「質問をたたんでかける」に言い換えられず、「質問をたたむ」に言い換えると非文になる。このことから、「体に香水をふりかける」では、前項の「振り(振る)」は本動詞の意味を保っているのに対し、「質問を畳みかける」では、前項の「畳み(畳む)」は本動詞の意味を失い、抽象化されたと言えようが、後項動詞「～かける」が担う役割はほぼ同じである。

「～かける」の役割について、森田良行(1989)は「何かがほかの事物を支えとして関係してくるという発想で、異なる二者の双方にまたがり関係を持つ状態である」と指摘している。つまり、人・物や作用などがA点からB点に渡ることを示しているのである。前述した「体に香水を振りかける」では、香水が瓶(A点)から体(B点)に、「質問を畳みかける」では、質問が質問者(A点)から相手(B点)に渡る、という役割である。「質問をモノを畳むように繰り返して聞く」という解釈が通用するとすれば、前項の「畳み(畳む)」は後項を修飾すると言えよう。そこから考えると、て形介入可能の類では、後項動詞のカケルと前項動詞は、意味上補い合い、意味的中心が後項にあると言い切れないが、前項が抽象化された類は、意味の中心が後項にあるように思われる。この現象から言うと、意味派生から生じる語彙的指向性「～かける」の自由度は統語的始動性「～かける」より高い感がある。それも、指向性「～かける」の前項動詞が特徴に乏しい理由の一つかもしれない。

ここまで、「始動」や「指向」に分類された語彙の前項にどのような特徴が備えられるか、つまり、どのような前項を持ったら始動性になり、または指向性になるのか、という点について考察を行ってきた。その結果を<1>～<7>のようにまとめることができた。ただ、始動性「～かける」と指向性「～かける」を更に下位分類すれば、何か下位分類まで区別できるファクターはないか、ということも考えられたいものである。

次の4.では、始動性「～かける」と指向性「～かける」の意味的下位分類にも、前項動詞の特徴が見えるかと仮定し、考察を行う。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

4. 意味の下位分類と前項動詞の特徴

3.では各意味用法の前項動詞の性質傾向について見て来たが、1.で述べたように、同じ「始動」と意味する複合動詞「～かける」には、進行中の時間的局面を示す場合もあるし、開始した動作を放棄すると示す場合もある。つまり、始動性「～かける」は意味的観点から更に下位分類する事は可能である。この点に関しては、指向性「～かける」も同様である。既にこのことを言及する先行研究を紹介しておきたい。

4.1. 姫野(1999)の意味的下位分類

姫野(1999:121)は「～かける」と「～かかる」を比較し、両者ともに「指向」と「始動」の意味があると指摘する。「始動」と意味する場合、及び「指向」と意味する場合の下位分類と対応は表三のようになる。

《 表三 》

複合動詞の意味		
A類[語彙的複合動詞[2]]：指向	「～かかる」 (例)	「～かける」 (例)
落下接触	落ちかかる	—
依拠接触	もたれかかる	もたせかける
志向接触	襲いかかる	吐きかける
心理的志向	—	笑いかける
志向移動	—	詰めかける
把捉	—	追いかける
通過遭遇	通りかかる	—
態度決定	決めてかかる	—
B類[統語的複合動詞[3]]：始動		
始動態	食べかかる	食べかける
将現態	死にかかる	死にかける

姫野(1999:142)より

始動を意味する統語的複合動詞の下位分類として「始動態」と「将現態」とがあるが、混乱しないように、本稿では「始動態」を「既現態」に言い換えることにする。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

4.2. 意味の下位分類における前項動詞の特徴について

ここでは、3.で観察された結果を姫野(1999)の提案と照合し、意味の下位分類における前項動詞の特徴について検討を行う。

以下、姫野(1999)の提案に従い、始動性「～かける」を既現態と将現態に分け、指向性「～かける」の意味を五つに下位分類し、考察を進める。3.で見てきたように、前項動詞の特徴のみから考えると、始動性「～かける」は指向より一層明確な傾向が見られるようである。しかし、始動性「～かける」と指向性「～かける」の意味を下位分類しようとする際に、前項動詞にはどのような特徴が見られるのか。以下では、それについて述べたい。

まず始動性「～かける」を見ていきたい。始動性「～かける」は既現態と将現態に分けれらる。姫野によると、「既現態」とは動作が途中まで行われたこと、あるいは、動作を半ばまで中止した意を表す。「将現態」とは、動作が行われる寸前の状態に達したことを表す。両者は前項動詞においてどのような特徴の分布を呈しているのか。まず、以下の(6)(7)を見よう。

（6） 「あなただけ、」言いかけたとき、女中がミルクを持って来る。

（太宰治「秋風記」）

（7） 何か云いかけそうにしてやめ、ルスタムは広間に入り、自分のいた場所にギーウを坐らせた。 （宮本百合子「古き小画」）

例(6)は既に言い出した既現態であり、例(7)はまだ何も口にしていない将現態である。姫野(1999:136)は、動詞の動作について、「その動作の継続部分の始まりに目をつけると、始動態(既現態)になり前の状態からその動作に入るという変化の瞬間性が強調されると将現態になる。」と指摘している。こういった視点の違いにより、「言いかける」は始動性になり、または指向性になる。姫野のこの指摘は確かであるが、姫野の考察は意味分析にとどまって、形態からの考察が欠けている。本稿は意味分析の不足を補おうとして、データとなる128語の異なる前置部を分類し、前項動詞の特徴を考察してきたが、 本稿のこの手法を取ると、「言いかける」のような一つの形態が二つの意味を持つ動詞の前項動詞特徴を見いだすことが難しい。

ところが、姫野の言う「動作の継続部分」は継続動詞に存在するものであるが、前項が瞬間動詞の場合、動作の継続部分を持たないため、将現態のみになるのではないかという疑問が

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

生じてくる。確かに「死にかける」のように、将現態としか捉えられない瞬間動詞は存在するが、「わかりかける」のように、将現態の存在が考えられにくく、既現態と解釈されやすい瞬間動詞もある。このように、前項が継続動詞の場合、形態上の特徴は見られにくいほか、前項が瞬間動詞の場合も、前項動詞の特徴で既現態か将現態かの区別を付けにくいことが分かった。

以上、始動性「～かける」について見てきた。以下では、指向性「～かける」について見ていきたい。姫野(1999)は指向性「～かける」を次のように下位分類をしている。

《 表四 》

「～かける」の複合動詞	自動詞か他動詞か	意味特徴
1. 対象 {に / へ / に} 物を～かける かべ 板を立てかける	他＋かける＝他	依拠接触
2. 人 {に / へ / に向かって / をめがけて} 物を～かける 人に つばを 吐きかける	他＋かける＝他	志向接触
3. 人 {に / へ / に向かって} 物を～かける 人 に 笑いかける	自＋かける＝自 他＋かける＝他	心理的志向
4. 場所 {に / へ / に向かって / をめがけて} ～かける 会場 に 詰めかける	他＋かける＝自	志向移動
5. 対象を～かける 犬を追いかける	他＋かける＝他	把捉

(姫野　1999:129)

①依拠接触:重さを対象に預けて位置を固定させる。例:もたせかかける

②志向接触:対象となるものに何かを当てる。例:吐きかける。

③心理的志向:相手に心理的影響を及ぼし、変化をおこそうとするもの。例:訴えかける。

④志向移動:主体者が何らかの目的を持ってある場所に赴く。例:押しかける。

⑤把捉:主体が先に移動している対象をとらえようとする動き。例:追っかける。

(姫野　1999:129-134)

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

姫野の意味分類に従い、採集した複合動詞「～かける」128例のうち、53語の指向性「～かける」の前項を観察した。その結果を以下の表五にまとめる。

《 表五 》

	瞬間	継続	意志	動態	方向性有り	結果性なし
依拠接触（9語）	89%	11%	89%	100%	89%	44%
志向接触（14語）	43%	57%	86%	100%	100%	57%
志向移動（7語）	43%	57%	100%	100%	86%	57%
心理志向（20語）	20%	80%	95%	90%	55%	0%
把捉　（3語）	33%	67%	100%	67%	100%	100%

2.で定義したように指向性とは「対象に向かって何らかの動作･作用を及ぼす」なので、複合動詞自体は意志動詞/動態動詞になるわけである。分類調査からも同じ傾向が示された。表4の通り、全部の下位項目は《意志動詞》《動態動詞》という二つの性質を持っている。

なお、表五から①依拠接触では瞬間動詞が多い、②心理志向では継続動詞が多く、結果性がない、方向性がやや弱い、③把捉では結果性がない、という三つの差異性が観察された。これを前述した姫野が提示した各下位分類項目の意味と照合すると、そういった前項特徴の分布は合理的であるように思われる。これについては、依拠接触を例にして説明したい。「重さを対象に預けて位置を固定させる」依拠接触では、後項のカケルで重さをA点からB点に預ける過程を表現し、実際の動作(預ける方向や、固定の仕方など)を前項動詞で表すため、前項は意志動詞/動態動詞/瞬間動詞/方向性有りの動詞を取るのが自然である。依拠接触に属するものに、前述で挙げたもたせかけるの他に、立てかける、寄せかける…などがある。このように、前述した差異性が存在することは観察されたものの、はっきりとした区別はあまり見受けられないようである。ただし、各下位項目の語数が少ないため、傾向観察として危ういという懸念もある。これを解明するため、今後は例文を増やし、更なる考察を進めていきたい。

以上で論じたように、複合動詞「～かける」は意味の下位分類において、前項動詞の特徴と意味的用法のつながりが不明瞭である。したがって、下位分類レベルの意味用法区別については、意味論から検討をも行いたい。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

5. まとめ

以上、前項動詞の性質と「～かける」意味用法の関連について考察してきた。ここまで考察してきたことを次のようにまとめる。

·複合動詞「～かける」には概ね「始動」と「指向」という二つの意味がある。始動性と指向性の段階では、前項動詞の特徴と意味用法の関連が見受けられ、具体的には以下のようである。

①前項が無意志動詞の場合、始動性「～かける」の可能性が高い。

②前項が静態動詞の場合、始動性「～かける」の可能性が高い。

③前項が変化動詞の場合、始動性「～かける」の可能性が高い。

④前項が自動瞬間動詞の場合、始動性「～かける」の可能性が高い。

⑤前項が方向性有りの他動意志動詞の場合、指向性「～かける」の可能性が高い。

·始動性と指向性の下位分類の段階に行くと、前項動詞の特性と意味用法の関連が薄くなる。

始動性および指向性「～かける」の前項動詞の特徴と意味用法の関連を探ってきたが、統計上にある程度の傾向が見られるとはいえ、前項動詞の特徴は始動性と指向性のレベルにとどまっており、意味の下位分類では不明確である。今後の課題として、下位分類での意味用法分析が残っているが、形態上は明確な特徴がなく、意味的な視点からの分析が必要である。

（ツァイシュンジェー　東海大學日本語文學系）

注

1. 動詞の「主体動作」「主体変化」「客体変化」を注目すべきと、最初指摘したのは奥田(1977)である。石井はそれに従い、複合動詞の組合せを観察した。
2. 最初に「語彙的複合動詞」という用語を提出したのは影山(1993)である。影山は複合動詞の派生過程に着目し、複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に大きく分類している。「語彙的複合動詞」には意味的制限がある。例えば、「飲み歩く」は「歩く」を付くことで、飲まれる対象が酒類に制限される。姫野は影山の二分類を元に、前後項の意味構成をさらに下位分類したのである。
3. 「語彙的複合動詞」に対し、意味的制限がなく、補文関係として分析できる語は「統語的複合動詞」という。例:「飲みかける」: 飲む対象の制限がないが、後項の「～かける」を付けることにより、「始動」のアスペクト的意味を持つことになる。

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC 國家圖書館

参考文献

石井正彦(2007)『現代日本語の複合形成論』ひつじ書房

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

北原保雄(1993)『日本語逆引き辭典』大修館書店

金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp.5-27

小泉保・船城道雄・本田晶次・仁田義雄・塚本秀樹(1989)『動詞用法辞典』大修館書店

仁田義雄(2002)『＜もっと知りたい！日本語＞辞書に書かれていないことばの話』
岩波書店 pp.142-143

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書房

(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

(2001)「複合動詞の性質」『日本語学 vol.20』pp.6-15

蔡薫婕(2006)「にかけての用法分析」

参考ウェブサイト（トップページのみ記載）

青空文庫　http://www.aozora.gr.jp/

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館

添付資料

「始動」という意味の「～かける」			「指向」という意味のかける	
上がりかける	壊れかける	飲みかける	煽りかける	畳み掛ける
開けかける	探しかける	昇りかける	浴びせかける	立てかける
歩きかける	仕掛ける	呪われかける	射かける	突っかける
言いかける	沈みかける	入りかける	誘いかける	詰めかける
行きかける	死にかける	生えかける	入れかける	出かける
動きかける	しまいかける	博しかける	歌いかける	問いかける
失いかける	閉めかける	剥げかける	打ちかける	泊まりがける
移りかける	出発しかける	運びかける	訴えかける	投げかける
怨じかける	進みかける	走りかける	追いかける	並べかける
冒されかける	倒れかける	始まりかける	覆いかける	乗りかける
行いかける	出しかける	引っ返しかける	押しかける	吐きかける
起こしかける	立ち上げりかける	発生しかける	追っかける	働きかける
起こりかける	立ちかける	弁解しかける	思いかける	話しかける
降りかける	食べかける	没しかける	語りかける	はねかける
降ろしかける	尽きかける	回りかける	着せかける	引きかける
終わりかける	躓きかける	纏いつきかける	斬りかける	吹きかける
買いかける	できかける	戻りかける	汲みかける	振りかける
帰りかける	出来上がりかける	やりかける	叫びかける	微笑みかける
書きかける	解きかける	読みかける	囁きかける	見かける
かけかける	取り落としかける	分かりかける	差しかける	見せかける
傾きかける	とろけかける	忘れかける	誘いかける	もたせかける
食いかける	治りかける	名乗りかける	仕掛ける	もたれかける
潜りかける	泣きかける		仕掛ける	持ちかける
腐りかける	無くしかける		喋りかける	寄せかける
暮れかける	なりかける		攻めかける	呼びかける
消しかける	眠りかける		注ぎかける	笑いかける
越えかける	罵りかける		尋ねかける	

NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC